

ジンバブエにおける学校体育の研究から確立する青年海外協力隊のビジョン

A vision of Japan Overseas Cooperation Volunteers establishing from a study of physical education in Zimbabwe

1K03A045-1 氏名 貝畑 四朗

指導教員 主査 中村千秋先生 副査 吉永武史先生

《序章》

私は2007年4月より国際協力機構(JICA)の一事業である青年海外協力隊(JOCV)派遣事業の平成18年度3次隊としてアフリカのジンバブエに渡る。活動内容はジンバブエ第3の都市ムタレにある小学校教員養成学校の体育教師として体育の指導、普及を主とする。JICAから受け取った派遣に関する資料は派遣内容が書かれたA4用紙1枚のみである。その用紙は要請に至った経緯と求められる業務内容、勤務地における運動設備、スタッフに関する情報を簡単にまとめたものである。カリキュラムや学校体育の歴史的背景、具体的な学校体育の課題といった類は一切理解することができない。そこで、ジンバブエの学校体育を見つめ、今後青年海外協力隊はどのようなビジョンを持つべきなのかを課せられた使命から明らかにすることを今回の研究目的とする。

方法として、ジンバブエの初等教育体育科及び中等教育体育科のシラバス、学術論文、青年海外協力隊の活動報告書などの文献、またはインターネットを参考にして研究を行う。

《第1章》

「世界学校体育サミット」(日本体育学会.2002)での報告を中心に、世界の学校体育の課題を紹介する。主要課題は以下の5つである。(1)体育に関する法律的な要件 (2)教科としての体育の位置づけ (3)カリキュラム上の時間配分 (4)教師教育 (5)資源 この報告から、国や州によって体育事情は違うが、世界的に体育科教育は危機的状況であることがわかる。

またユネスコ体育・スポーツ国際憲章、世界スポーツ・運動フォーラム、世界保健機構など国家水準で体育を確立するための国際的な政策声明文が発表されている。

《第2章》

ジンバブエの学校教育に関して学術論文を用い、独立前後の学校教育の動向を始め、歴史的背景を基に細かなジンバブエ独特の教育制度を検討した。

《第3章》

第1節では体育科が迎ってきた変遷を追った。第2節では教育スポーツ文化省とスポーツ・レクリエーション委員会の機能と役割を整理した。第3節ではジンバブエの初等

教育及び中等教育の体育科指導要領を考察した。また、初等教育体育科と中等教育体育科の目標分析及び比較を行い、どういった位置づけで授業展開を目指しているのか検討した。第4節では学術論文より、ジンバブエの学校体育の課題を挙げ、考察した。考察した課題は「(1)体育とスポーツの同義的解釈(2)生活環境格差と学校体育の在り方(3)学校体育の法的義務性」の3つであった。第5節ではJICAとJOCVの概要、実績を把握し、青年海外協力隊7名の活動報告書から課題を分析した。課題をハード面、ソフト面、人材面の3つにグループ分けし、原因を探った。ハード面の課題では備品管理の怠慢、備品の不足、施設の乏しさが挙げられた。これは概して体育の評価が低いため、予算が下りないことがひとつの原因となっている。ソフト面の課題では、スポーツのルールや応急手当などの体育に関する情報量の乏しさが目立った。人材面では知識、技術、意欲、全てにおいて不足しており、体育に関しては、知らない、できない、やろうとしない教師が多くいることが分かった。

《第4章》

最後に、今後のジンバブエにおける体育隊員のビジョンを提言とする。

1.ナレッジを生み出し、活かし、育む。

ジンバブエの学校体育はマニュアルやガイドラインを遵守していないもしくは存在しないといった事態が目立つため、そういったナレッジ(情報、知識)を有形物にし、改訂しながら活用することが今の学校体育の現状を打開する。

2.予防と緊急時対応、2つの観点からの安全対策の徹底。

グラウンドには草やガラス、穴などの危険が伴っているのが現状である。またケガをしたとしても教師、生徒ともに応急手当を行うことができない傾向にある。この現状に安全対策を施さなければならない。

3.体育・運動・スポーツによる経験価値を高める。

良質なスポーツや運動の経験を断続的に重ねることがこれらの現状を克服し、更には体育やスポーツの評価向上に繋がる。